生後三年目における情動制御の発達

坂上裕子
（東京大学大学院教育学研究科）

＜問題と目的＞
情動制御とは、情動的コンピテンスの構成要素の一つに数えられ(Saarni, 1990)、情動のコンピテンスな機能をガイドするための、情動発起の制御を指す。生後3年目に入ると、言語能力、特に情動語の理解能力、使用能力の増大が情動制御に大きく貢献すると指摘されている(Dunn & Brown, 1991)。この時期に、情動制御の方法に具体的にはどの様な変化があるのかは明らかにされていない。本研究では、生後3年目における情動制御の方法にどの様な質的変化が生じるのかを検討し、情動制御の発達に関する仮説を生成することを目的とした。

＜方法＞
手続き 2歳代の子どもを持つ母親10人に、子どもの情動制御行動に関するインタビューを実施。インタビューは、子どもの月齢が24、27、30、33、36カ月時の5時点行った。
インタビューの内容 子どもが潜在的にストレスフルと感じる様な場面（35場面、Lookabough & Fu, 1991より抜粋）を提示し、その時の子どもの具体的な情動の報告を求めた。また、最近子どもに生じた情動的な出来事のうち、印象に残っているものについて報告を求めた。

＜結果と考察＞
1. 分析カテゴリーの作成
母親の報告から得られた、情動制御に関する子どもの発言内容を分析するにあたり、以下のカテゴリーを作成した。
1) 即時的な情動制御 - a) 問題焦点型の行動への言及、 b) 情動焦点型の行動への言及と要請、 c) 自己への評価及び属性への言及、 d) 社会的規則や生活習慣への言及

II. 即時的な情動制御 - e) 将来の快事象への言及、 f) 予期的制御（不快事象の生起を察知した、事前の状況操作）、 g) 不快事象の避難・虚偽

2. カテゴリーの分析
インタビューの回答より、各カテゴリーに該当する言及び有無をチェックした。
1) 即時的な情動制御について：
a) 問題焦点型の行動、 b) 情動焦点型の行動への言及は、24カ月時にはほとんど認められなかったが、30カ月の時点で8割の子どもに認められた。また、c) 自己への評価、自分の属性への言及があったという報告は、30カ月前後から認められるようになり、33カ月時には半数以上の子どもに認められた。

II. 即時的な情動制御について：
e) 将来の快事象への言及、 f) 予期的制御、 g) 不快事象の避難・虚偽は、24、27カ月時にはごく少数の子どもにしか認められなかったが、33カ月時には9割の子どもに認められた。

以上より、生後3年目には情動制御に次の様々な変化が認められると考えられる。
1) 自己の発達特に顕著に自己（性別、年齢、「赤ちゃん」から「お乌克兰」「おばさんが」へ）の発達、自己への評価の出現が、情動の制御に貢献する。
2) 不快情動を喚起させる事象の未然の防止を試みる、将来生じる可能性のあるポジティブな結果を想起することにより、不快情動を制御することができるようになる。

以上の2点の変化は、情動の制御が直接的、即時的行動のレベルでのみ行われるのではなく、より自己と結びついた形で、表象レベルで行われるようになることを示唆していると言えるだろう。